

Subject : **Japanese**Production of Courseware
e- Content for Post Graduate CoursesPaper No. 02 : **日本語学 (Japanese Linguistics)**Module 30 : **第二言語習得 (Second Language Acquisition)**

ज्ञान-विज्ञान विमुक्तये

**Development Team****Principal Investigator:****Prof. Anita Khanna**

Jawaharlal Nehru University, New Delhi

Paper Coordinator:**Prof. Prashant Pardeshi**

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Content Writer:**Prof. Prashant Pardeshi**

The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL)

Content Reviewer:**Prof. Emerita Yuriko Sunakawa**


University of Tsukuba

Japanese

Japanese Linguistics

第二言語習得 (Second Language Acquisition)

Description of Module	
Subject Name	Japanese
Paper Name	日本語学 (Japanese Linguistics)
Module Title	第二言語習得 (Second Language Acquisition)
Module ID	JPN-P02-M30
Quadrant 1	E-Text

 **Pathshala**
पाठशाला
A Gateway to All Post Graduate Courses

Japanese

Japanese Linguistics

第二言語習得 (Second Language Acquisition)

第二言語習得

目的：このモジュールの目的は、応用言語学の研究分野の一つである「第二言語習得」

について解説し、日本語を第二言語として学ぶ学習者のデータベース・コーパスを紹介することである。

1. 第一言語，第二言語とは

第一言語 (first language) という用語は母語 (mother tongue) を意味する。母語とは我々が生まれて初めて獲得する言語である。そのため、第一言語とも言われる。一方、第二言語 (second language) とは母語より後で、二番目以降に学習する言語である。日本語は学習者の皆さんにとって第二言語であり、外国語 (foreign language) でもある。

第二言語と外国語は学習環境の違いによって区別される場合がある。例えば、もし皆さんがインドで日本語を学習する場合、日本語は外国語と称され、もし日本に留学して日本で日本語を学習する場合は、日本語は第二言語と称される。このように学習環境の違いによってあえて外国語と第二言語という二つの用語を区別する場合があるが、それ以外の場合は、一般的には外国語と第二言語を区別せず、両方まとめて

だいにげんご しょう だいにげんご がくしゅうしゃ がくしゅうもくひょう げんご
 て第二言語と称する。第二言語は学習者にとって学習目標である言語でもあるため、
 もくひょうげんご よ
 目標言語 (target language) と呼ばれる。

2. 第二言語習得論 (第二言語習得研究) とは

だいに げんごしゅうとくろん だいに げんごしゅうとくけんきゅう われわれ だいにげんご がくしゅう
 第二言語習得論 (第二言語習得研究) とは我々が第二言語をどのように学習し
 かがくてき けんきゅう がくもんぶんや ぐたいてき けんきゅうぶんや がくしゅうしゃ
 ていくのかを科学的に研究する学問分野である。具体的にこの研究分野は、学習者が
 がくしゅう かつてい ごよう ひ お ごよう よういん かか
 学習の過程でどのような誤用を引き起こし、その誤用にどのような要因が関わって
 だいいちげんご しゅうとく だいにげんご しゅうとく おな ちが
 るのか、第一言語の習得と第二言語の習得のプロセスは同じなのか、それとも違うの
 ちが ちが がくしゅう かんきょう がくしゅうかつてい えいきょう
 か、違うのであればどのように違うのか、学習の環境は学習過程にどのような影響
 およ けんきゅうかだい ついきゅう だいにげんご がくしゅうかつてい あき
 を及ぼすのか、などといった研究課題を追求し、第二言語の学習過程を明らかにする
 めざ
 ことを目指している。

3. 誤用とは

だいにげんご がくしゅう かつてい がくしゅうしゃ がくしゅうもくひょうげんご さまざま ひぶんぼうてき
 第二言語を学習する過程において、学習者は学習目標言語で様々な非文法的な
 あやま きそくてき く かえ がくしゅうしゃ きそくてき く かえ あやま ごよう よ
 誤りを規則的に繰り返す。学習者によって規則的に繰り返される誤りを誤用と呼ぶ。
 もくひょうげんご しゅうとく かつてい あやま ひつぜんてき お さ とお
 目標言語を習得していく過程で、誤りは必然的に起こるものであり避けて通ることが
 できない。

4. 第二言語習得論 (第二言語習得研究) の変遷

4.1 誤用研究

1940～50年代頃から学習者が外国語を上手に使えるようになるために、誤用を最小限に留めることを目的とした教育方法を開発する研究が行われるようになった。以下では学習者の誤用を分析し、誤用の原因を探る研究の流れを紹介する。

4.2 対照分析

1940～50年代頃は、学習者の誤用は学習者の母語と目標言語間の異なる部分が原因で引き起こされると考えられていた。つまり、学習者の母語と目標言語の間で共通している部分は学習者にとって習得しやすいものであり、学習者の母語と目標言語の間で異なる部分は習得することが難しいと考えられていた。そのため、学習者の母語と目標言語を比較して、二つの言語間の「共通する部分」と「異なる部分」を明らかにする研究が盛んに行われた。このような研究を「対照分析」と呼ぶ。

しかし、その後、学習者のすべての誤りが学習者の母語と目標言語の違いによって引き起こされるというわけではないことが明らかになり、対照分析だけでは十分ではないと考えられるようになった。日本語で具体的な例を考えてみよう。日本語ではイ形容詞とナ形容詞の否定形の作り方が違う。イ形容詞の否定形は「美味しくなく

ように「イ形容詞の語幹+くない」であり、ナ形容詞の否定形は「きれい {ではない,
 じゃない}」のように「ナ形容詞+ {ではない, じゃない}」である。学習者はこの
 区別をせず、ナ形容詞の否定形の作り方をイ形容詞にも当てはめ、「美味しい {ではな
 い, じゃない}」のように誤用を起こすことがよくある。この誤用の原因は学習者の
 母語の構造とは無関係であり、母語と目標言語の違いだけでは説明できない。

Corder (1967) は学習者の誤用を分析し、その原因を探るという新しい研究方法論
 を提案し、それ以来言語習得研究の手法は「対照分析」から「誤用分析」へと変わっ
 ていった。

4.3 誤用分析

学習者の誤用には母語が原因の誤用に加え、母語とは無関係な誤用も含まれる。
 母語が原因である誤用を「言語間の誤り」、母語とは全く関係なく習得の過程で起
 くる誤用を「言語内の誤り」と呼ぶ。しかし、学習者の誤用を分類することはかなり
 難しい。さらに、学習者が自信がない形式を使わない、つまり、回避することもしば
 しばある。誤用分析では学習者が実際に起こす誤りを分析することは可能であるが、
 学習者が苦手な形式をそもそも使わないという回避の問題に対応することはできない。
 誤用分析の限界を踏まえ、1970年代半ば以降は学習者の誤用だけではなく、学習者

ただ つか せいや ふく がくしゅうしゃ げんごぜんたい ぶんせき たいしょう ちゅうかんげんご
 が正しく使っている正用も含めた学習者の言語全体を分析の対象とする「中間言語
 ぶんせき けんきゅうほうほう ていあん げんざい
 分析」という研究方法が提案され現在にいたっている。

ちゅうかんげんごぶんせき 4.4 中間言語分析

ちゅうかんげんごぶんせき ほうほうろん がくしゅうしゃ しゅうとく もくひょうげんご
 中間言語分析という方法論では学習者が習得しようとしている目標言語をどのよ
 つか せいや ごよう りょうほう ふく ぜんたい ぶんせき たいしょう
 うに使っているか、その正用と誤用の両方を含めた全体を分析の対象としている。

がくしゅうしゃ つか もくひょうげんご たいけい がくしゅうしゃ ぼ ご たいけい ちが もくひょうげんご たいけい
 学習者が使う目標言語の体系は、学習者の母語の体系とも違い、目標言語の体系とも
 こと がくしゅうしゃ ぼ ご もくひょうげんご ちゅうかん い ち げんごたいけい
 異なる、学習者の母語と目標言語の中間のどこかに位置する言語体系である。このよ

がくしゅうしゃ あたま なか どくじ つく もくひょうげんご たいけい ちゅうかんげんご
 うに、学習者の頭の中で独自に作られる目標言語の体系のことを「中間言語
 よ がくしゅうしゃ ちゅうかんげんご たいけい つね しゅうせい
 (interlanguage)」と呼ぶ。学習者は中間言語の体系を常に修正していきながら

もくひょうげんご たいけい ちか きんねん だいにげんごしゅうとくけんきゅう しゅうりゅう ちゅうかんげんごぶんせき
 目標言語の体系に近づいていく。近年の第二言語習得研究の主流は中間言語分析で
 ちゅうかんげんご もくひょうげんご ちか かてい かいめい
 ある。中間言語が目標言語に近づいていく過程とそのメカニズムを解明することを

め ぎ ぼ ご こと にほんごがくしゅうしゃ ちゅうかんげんご けんきゅう おこな
 目指して、母語が異なる日本語学習者の中間言語の研究が行われている。

てんい 4.5 転移

がくしゅうしゃ ぼ ご ちしき もくひょうげんご しゅうとく えいきょう およ ばあい た た ぼ ご
 学習者の母語の知識が目標言語の習得に影響を及ぼす場合が多々ある。母語の

たいけい もくひょうげんご たいけい に がくしゅう えいきょう およ かのうせい
 体系と目標言語の体系が似ていれば、それが学習にプラスの影響を及ぼす可能性があ

せい てんい よ ぎやく ぼ ご ちしき もくひょうげんご
 る。これを「正の転移 (positive transfer)」と呼ぶ。逆に母語の知識が目標言語の

がくしゅう さまた ばあい ふ てんい よ ふ てんい
 学習の妨げとなる場合を「負の転移 (negative transfer)」と呼ぶ。負の転移は

がくしゅうしゃ ぼ ご ちしき かぎ がくしゅうしゃ ぼ ご がくしゅうしゃ
 学習者の母語の知識にのみ限られたものではなく、学習者の母語のみならず学習者

し ほか げんご てんい ばあい
 が知っている他の言語からの転移の場合もある。

5. 学習者コーパス・データベース

がくしゅうしゃ つか にほんご にほんご しゅうとくけんきゅう か きちよう けんきゅう
 学習者が使う日本語は日本語の習得研究に欠かせない貴重な研究データである。

きんねん さまざま がくしゅうしゃ こうちく こうかい にほんご がくしゅうしゃ
 近年、様々な学習者コーパス・データベースが構築・公開されている。日本語学習者

はな ことば か ことば しゅうせき にほんご がくしゅうしゃ こくりつこくごけんきゅうじょ
 の話し言葉や書き言葉を集積した日本語学習者コーパスもある。国立国語研究所の

「コーパス・データベース」のサイト (<http://www.ninjal.ac.jp/database/>) から、以下

がくしゅうしゃ じょうほう え
 の学習者コーパスについての情報を得ることができる。

ちゅうごくご かんこくご ぼ ご にほんご がくしゅうしゃ じゅうだんはつわ
 (1) 『中国語・韓国語母語の日本語学習者縦断発話コーパス』 (C-JAS)

たげんご ぼ ご にほんご がくしゅうしゃ おうだん
 (2) 『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』 (I-JAS)

にほんご がくしゅうしゃ にほんご ぼ ご たいしゅう
 (3) 『日本語学習者による日本語・母語対照データベース』

てらむらごようれいしゅう
 (4) 『寺村誤用例集データベース』

じょうき りょうしんせい ひつよう むとうろく りょう
 上記の (2) については利用申請が必要だが、(1), (3), (4) については無登録で利用できる

がくしゅうしゃ にほんご がくしゅうしゃ しゅうとくけんきゅう おお こうけん
 る。学習者コーパスは日本語学習者の習得研究に大きく貢献するものであるとともに

がくしゅうしゃ にほんごしよう にほんご ぼ ご わしゃ にほんごしよう ひかく
 に、 学習者の日本語使用を日本語母語話者の日本語使用と比較することにより、
 にほんご ぶんせき かつよう
 日本語の分析にも活用することができる。

てらむらひでお がいこくじんがくしゅうしゃ にほんごごようれいしゅう おおさかだいがく ねん
 寺村秀夫 『外国人学習者の日本語誤用例集』（大阪大学，1990年）という

けんきゅうほうこうくしょ ぼん ぼん い か こうかい
 研究報告書のPDF版およびデータベース版は以下のサイトで公開されている。

<http://teramuradb.ninjal.ac.jp/>

た さまざま がくしゅうしゃ い か せつめ しょうかい
 その他の様々な学習者コーパス・データベースは以下のリンクの4節目で紹介されて
 いる。

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/research/201602.html>

キーワード：

だいにげんご だいにげんごしゅうとくろん だいにげんごしゅうとくけんきゅう ごよう ごようけんきゅう たいしょうぶんせき
 第二言語 第二言語習得論（第二言語習得研究） 誤用 誤用研究 対照分析
 ごようぶんせき ちゅうかんげんごぶんせき がくしゅうしゃ
 誤用分析 中間言語分析 学習者コーパス
